

小さな群れ

カトリック美唄教会

2023年 4月 No.311

2023年3月26日発行

Fr.Narciso Cavazzola ofm



4月は2日から「大週間」と呼ばれていた「聖週間」を迎えます。主の過ぎ越しの神秘を中心として、キリストの救いのわざ全体を記念する一週間です。

4月9日は復活祭です。教会では、1年を周期としてキリストの神秘全体を展開しますが、復活祭はその典礼暦年の頂点です。

復活の主日から復活の第2主日までの8日間は、どんな祭日、祝日があっても復活の祝いだけを祝います。

また、復活節は50日間祝われます。この季節は、自然をはじめ、いろいろのことが「新しいのち」、新しい旅の出発を感じさせてくれるでしょう。実に、復活節はすべてにおいて喜びに満ちあふれています。

典礼の朗読も喜びに満ちあふれて宣教に出かける使徒たち、教会の誕生と成長を伝える使徒言行録に、毎日触れさせてくれます。教皇フランシスコは、宣教への熱意・信者の使徒的情熱についての連続講話を始められました。教皇はこの中で「イエスの弟子の共同体は、実際、使徒として、また宣教者として誕生しました。」([第1回講話](#))と言っておられます。復活節に宣教としてのテーマを深めるのは意味あることです。

教皇のこの講話は、今年の復活節をととても豊かにしてくれることでしょう。

また、この月、教会共同体に新しく加わった方と心を合わせ、教会メンバーであることを意識しながら、ともに歩んでまいりましょう。(参個：Laudate)

主任司祭 ナルチゾ神父

2023年4月 主日ミサ・平日のミサ 予定

美唄教会 小さな群れ
2023年 4月 No.311
2023年 3月26日発行

日	曜	ミサ		各種勉強会	会議・その他事項
		主日・祭日	時間		
2	日	受難の主日 (枝の主日)	午前 11:00		
6	木	聖木曜日 (主の晩さん)	午後 7:00 砂川教会		砂川教会にてミサ (美唄はありません)
7	金	聖金曜日 (主の受難)	午後 7:00 砂川教会		十字架の道行 午後3時～
8	土	聖土曜日 (復活徹夜祭)	午後 7:00 砂川教会		砂川教会にてミサ (美唄はありません)
9	日	復活の主日	午前 11:00		
14	金		午前 10:30	ミサ後聖書に親しむ	
16	日	復活節第2主日	午前 11:00		ミサ後 運営委員会 会計監査
21	金		午前 10:30	ミサ後聖書に親しむ	
23	日	復活節第3主日	午前 11:00		
28	金		午前 10:30	ミサ後聖書に親しむ	
30	日	復活節第4主日			第12回定期総会

《 平日のミサ 》 **金曜日のみ 午前 10:30** 7・14・21・28日です

《 聖書を親しむ 》 平日のミサ後、旧約聖書に親しんでみませんか。

霊名の祝日 (敬省略)

清掃当番

花 当番

16日 ベルナデッタ 大城繁子・世羅征子・佐藤順子	第2週 葛西・東 第4週 中村	東
---------------------------	--------------------	---

【お知らせ】

- ◎ミサ曲（610 いくしみの賛歌・612 栄光の賛歌・613 感謝の賛歌・614 平和の賛歌）の練習を復活祭後から始めます。
- ◎4/30日定期総会を行います。今年は役員改選となっております。是非役員の申し出を募って下さい。
- ◎4/19日(水) 午後6時よりロザリオ会を再開いたします。共に祈りましょう。
- ◎5/28日(日) 滝川教会50周年記念ミサが司教様司式で行われます。

砂川の地下水となって

北海道の空知地方の砂川に、カトリック教会が存在することは、大きな恵みである。また、それは、これからの砂川の発展にも関係があると思う。

このように言うと、何か妄想でも冒したかのように思われそうだが、現実的な話なのである。それを、説明してみようと思う。

話の前に、日本でのカトリック教会の歴史について考えることが必要であろう。なぜなら、今日という社会は、長い歴史の中での“今”だからである。

ザビエルによって始められた日本の宣教活動は、その後の多くの宣教師達によって展開し、発展していった。日本人は、キリスト教に接し、人格、人権、人間の真の目的、幸福、生き甲斐、西洋の学問などを学び、新しい日本を目指すかに見えた。

しかし、仏教界からの強い反対などがあり、為政者達はキリスト教を、日本を侵略する手先として理解し、キリスト教禁止令を以て退けてしまった。気が付くと、明治時代となって、西洋との深い結びつきを持たざるを得なくなっていた。キリスト教によって培われた西洋の諸文化に圧倒された日本は、その根底にあるキリスト教を抜きにして、外面的に西洋の文化を取り入れて、その影響のもとに、科学技術の発展を遂げていくことになっ

た。

しかし、この発展は、かつての日本の宣教師達によるのであるが、特に一人の宣教師の来日によってもたらされたのである。つまり、1708年に屋久島に上陸したイタリア人のシドティ神父が、教皇の使節として死を覚悟でキリスト教禁止令下の日本に潜入し、将軍に会い、禁教令を解くように努めようとしたのであった。しかし、1709年彼は江戸に送られ、牢獄である切支丹屋敷に収容され、結局、禁教令の撤回は果たせず、1714年3月、召使の長助はる夫婦に洗礼を授けたという違反行為によって、独房に幽閉された。

その半年後の10月21日に帰天、つまり殉教するのであった。

このシドティ神父を尋問したのが、当時の学者を代表する第6代将軍家宣の侍講新井白石であった。彼は多くの西洋に関する知識を教えられ、オランダと中国とだけに限られていた交易から、さらに西洋の諸国の文化に接する必要を感じ取り、彼新井白石の退任後の禁書緩和令（1720年）と繋がるような功績を残した。

しかし、禁教令下の日本の学者達の多くは、禁書であるキリスト教に関係のある中国で宣教するイエズス会の司祭達による漢籍書を目にしていた。キリスト教に関する言葉を口にしてはならない時代に、それらが含まれる禁書類を日本の有名な学者たちも読んでいた。そのような中で、ある学者は堂々と禁書であるキリスト教書を褒めてもいる。また、国学者である平田篤胤などは、「本教外篇」（1806年）などに禁書の中の文書をそのまま引用もしている。

このような状態であったから、キリスト教は地下水、伏流水として日本人の中に存在し、影響を与えていたのである。

このことを、2014年に発掘されたシドティ神父の骨をDNA鑑定し、彼のものにほぼ間違いがないと、現在、上野の国立科学博物館長の篠田謙一氏が公表した。彼の著「江戸の骨は語る」（2018年）には、次のように書かれている。

「彼の来日は江戸に西洋科学をもたらすきっかけとなり、やがて来る明治時代における日本の科学・技術発展の基礎を形成することになった。その延長線上に現在の科学があり、

またシドッチを再びわれわれの前に出現されることになった。来館者には、三〇〇年という歴史の流れも感じてもらいたいと考えた。」（「江戸の骨は語る」国立科学博物館長篠田謙一著 2018年 岩波書店 P.133。「彼」とは、シドティ神父のこと）

とにかく、カトリック砂川教会と砂川天使幼稚園は、砂川の地下水、伏流水として流れているのである。知らずにいるのは、カトリック教会側も含めて市民であろうか。どんな時でもキリスト自身が宣教なさっているのである。私はそれを確信している。この文書を、今も砂川教会で祈っている皆さんと、幼稚園で働く皆さんにお届けしたいと願って書いた。

私は、砂川教会出身者として、砂川のために祈り続けたいと願っている。神の祝福、恵みが豊かにありますように。砂川のすべての方々に神様から豊かなお恵みがありますように祈りつつ。

2023年3月8日 瀬田の聖アントニオ修道院にて 続橋和弘

